男女共同参画推進センター 機関誌

京からあすへ Vol.3

2023年10月6日発行

発　　行 京都大学男女共同参画推進センター
〒606-8303　京都市左京区吉田橘町
TEL　075-753-2437
E-mail　w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
URL　https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

制作協力 京都通信社
デザイン 中曽根デザイン

KYOTO UNIVERSITY

京からあすへ

京大からひろがる
色とりどりの未来

2023
October
Vol.3

京都大学男女共同参画推進センター

京からあすへ
Vol.3

CONTENTS

02 巻頭特集
ジェンダーをとおして学ぶ
社会と文化、私たちの暮らし

08 **未来に贈るきらめくバトン**
研究者インタビュー
山守瑠奈（フィールド科学教育研究センター）
末長英里子（経営管理大学院）
池亀 彩（アジア・アフリカ地域研究研究科）

14 **みちみちて一歩**
卒業生インタビュー
堀井詩織
小林佳代
藤本結月

20 **密着！　京大生の一日**

22 Recommend
わたしの味方、わたしの見方

ジェンダーをとおして学ぶ

社会と文化、私たちの暮らし

京都大学が掲げる「男女共同参画推進アクションプラン」のもと、さまざまな取り組みや事業を実施する男女共同参画推進センター。多様な取り組みの一つが学生を対象としたジェンダー科目の実施です。私たちをとりまく社会や暮らしなどに根づき、だれもが関係するジェンダーについて、講義やディスカッションなどのさまざまな方法で学びます。

その1　全学共通科目「ジェンダー論」

→4ページ

授業の概要・目的

ジェンダーを理解し、問題解決の方法を考える力を養います。既存の研究分野にジェンダーの視点を取り入れることで、どのような新たな切り口が開かれるのか、さらに、日本および世界のジェンダーの状況や課題について、多彩なゲストスピーカーが講義します。

授業をとおして知ってほしいこと

川島●ジェンダーは世の中のあらゆる物ごとに関係します。授業をとおして、これまでに生きてきた社会を、新たな視点で見つめてみましょう。

リレー講義である「ジェンダー論」には、研究者などの学術分野だけでなく、さまざまな分野で活躍する方がたに登壇いただきます。講師それぞれの切り口から提供される話題は、大学に入ったばかりの1回生にとって、世界を広げるきっかけとなるはず。大学の「研究」とはなにかを掴む手がかりにもなると期待しています。

授業計画と内容（2023年度）

生物学的に見た性別 / 社会文化的に見たジェンダー / 社会科学 / 労働法 / 社会保障 / 家族法 / 文学から見たジェンダー / ジェンダー政策 / 戦争 / 男性性（マスキュリニティ） / LGBT、SOGI / 日常における実践

＊内容はゲストスピーカーの都合などで変更があります。

その2　ILASセミナー「ジェンダーと文学」

→6ページ

授業の概要・目的

学部1回生向けに開講する少人数教育科目群「ILASセミナー」では、文学や映画をもちいてジェンダーやセクシュアリティをめぐる表現を検討します。後半は学生それぞれが一つの作品やジャンルを選び、調べ、考えたことを発表し、ディスカッションします。

授業をとおして知ってほしいこと

川島●授業で扱う題材は、文学や映画など、なにげなくふれているエンターテイメント作品。ふだん深く考えずに楽しんでいる作品も、「ジェンダー」のフィルターを通すと、プラス・マイナス面ともに新たな発見や疑問と出会えます。慣れ親しんだ作品に新鮮な気持ちで向き合えるようになるでしょう。

受講生には、すでに専門的な知識を備えた人もいれば、新たなテーマとしてこれからジェンダーを考えようという人まで多様です。この授業の特徴は、自分の視点や考えを発表し、ほかの学生と感想や意見を交わすなど、他者と話ができること。「自分でもジェンダーのことを話せるんだ」という実感を得て、研究や将来にいかしてほしいです。

授業計画と内容（2023年度）

講師
川島 隆
文学研究科

グリム童話および関連する映画作品 / アンデルセン童話および関連する映画作品 / 聖書、ホメロス、LGBT問題 / シュピーリ『ハイジ』 / ケストナー『飛ぶ教室』 / 学生による発表

全学共通科目「ジェンダー論」

日常における実践

「性的同意を学ぼう」

Genesis 共同代表
高島菜芭さん　京都大学法学部 卒業
鈴木七海さん　京都大学経済学部 卒業

ロールプレイで学ぶ性的同意

高島　私たちの担当する回では、性的同意についてのロールプレイに取り組みます。性的同意とは、かんたんに言えば性的な行為のさいに、相手の意思確認をすることです。DVや性暴力のないパートナーシップを築いていくためにとても重要な概念です。受講生は1回生が中心です。**まだ恋愛経験のない学生も多く、「自分には関係がない」と思うかも**しれません。

高島さん

鈴木　でも、**同意が必要な場面は、パートナー間だけには限りません。**友だちとの恋バナや、なにげないスキンシップにモヤッとすることはありませんか。それは、じつは嫌なのに、同意している前提でコミュニケーションが行われているからです。受講生それぞれが自分ごととして捉えられるよう、大学生にあるあるのシチュエーションでロールプレイをします（右図）。また、男性から女性だけではなく、同性同士や女性から男性へのハラスメントもあります。そのため、ロールプレイではあえて性別や性的指向を明示しません。

高島　自分には直接に関係なくても、たとえば、目の前で友人がセクハラをされている場面にあったり、嫌がっているのにむりやり恋人の有無を聞き出そうとする場面にあったり、**知らず知らずのうちに関係する可能性**もあります。実践をとおしてまず、**性的同意**の概念を知ってほしい。パートナーとの関係に役立てたり、それぞれの生活のなかで活かされれば、なおうれしいです。

鈴木　**場面を思い浮かべながら実際に動くことで理解できる**ことも多いはず。知識はほかの回で身につけて、私たちの回では身体をとおして、腑に落ちる経験をしてほしいです。

鈴木さん

私の感じたこんなモヤモヤ

高島　受験勉強に励んでいると、同級生から「勉強のできる女性はモテない。勉強はそこそこに、いい夫を見つけるのが女性の幸せだ」と言われたことがあります。**目標があって勉強しているのに、なんで女性というだけでそう言われるんだ、というモヤモヤ**がジェンダーに関心をもつきっかけでした。

鈴木　私は3姉妹の長女で、近所の人から「あなたがいいお婿さんを連れてこないとね」と言われたのがショックで。期待される将来が性別によって違うことに違和感がありました。当時は「努力して結果を出せばいい」と思っていたのですが、大学の授業をとおして、**性別や民族、社会構造によって、努力ではどうにもできない制約**があることに気がついた。私のモヤモヤは社会の構造的な課題とつながっていると思うようになったのです。

「ジェンダー論」を学ぶ理由

鈴木　悩みや違和感は個人の問題だと思いがちですが、じつはその根底は社会構造に起因することも多いです。**ジェンダーはそうした社会構造のひとつ。**物事をジェンダーの切り口から眺める考え方は、ほかの社会構造を考えるときにも応用できます。いつか悩みに直面したときに、救われる場面もあると思います。

高島　意識してみると、**日々の会話のあちこちにジェンダーに関わる話題があります。**たとえば、だれもが、異性に恋愛するのが当然という前提で、恋人の有無を聞かれることは男女問わず経験があるはず。しかし、そのような前提自体に違和感をもつことはありませんか。これは、ジェンダーの問題で、だれもがかならず関係することなんです。

最後に…

二人からのエール

鈴木　高校生のときに見えている世界はほんの一部。たとえば、歴史の教科書では女性のロールモデルが見つからないかもしれないけれど、調べてみればいつの時代にもかっこいい女性がいます。視野を広くもって、自分の頭で考える力をつけてほしい。

高島　ジェンダーだけでなく、経済的状況や国籍、民族などの理由から、困難を抱えている人たちもいます。この特集を読んでいる人のなかにも、いままさに困っている人もいるかもしれません。私はそのような学びや気づきを大学で得ることができました。みなさんといっしょにこのような課題を解決するために行動していきたいです。

ILASセミナー「ジェンダーと文学」

文学や映画に表現される ジェンダーを考えてみよう

**文学や映画などの言葉をもちいたエンターテイメント作品を取り上げて、
そこにジェンダーやセクシュアリティをめぐる問題がどのように表現されているのかを学びます。
後半の授業では、学生たちが好きな作品を選び、授業で学んだジェンダー学の視点で考えた内容を発表します。
発表後のディスカッションは、受講生のほぼ全員から質問や感想が投げかけられ、活発な議論が巻き起こります。**

発表1 メディアと男性同性愛者

齋藤崚貴さん 文学部

メディア、とくにテレビ番組における男性同性愛者の扱われ方を調査しました。

近年、性的マイノリティを「受け入れる」風潮が広がっていますが、メディアにおける性的マイノリティの扱い方も、それにともない変化しているのではないかと考えました。そのなかでも、今回の発表では男性同性愛者に焦点を当てました。

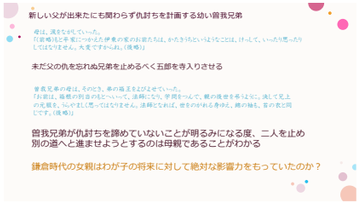
昭和後期におけるテレビのなかの男性同性愛者は、あきらかに「色物」として扱われており、「気持ち悪い」笑いを演出する要素となっていました。しかし、最近人気のテレビドラマ・シリーズである『おっさんずラブ』や『きのう何食べた？』では、ごく一般的な男性同士が恋に落ちるようすが描かれています。やはり、時代とともに扱われ方が大きく変化しているなと感じました。

受講生が取り上げる題材は、文学作品や映画、音楽作品の歌詞など多岐にわたる

時代のほか、国や地域などの違いでも、扱われ方が変わりますね。

発表2 軍記物語から鎌倉初期のジェンダーを考える

鎌倉初期のジェンダーをその時代を舞台とした軍記物語（今回はそのなかでも『義経記』と『曽我物語』を題材としました）をとおして理解し、**鎌倉時代は男女のあいだの役割にどのような差があったのか**を考察しました。



鎌倉時代は男女不平等の世であったという説と、女性の権利が保障された男女平等な世であったという説の両方を見かけるので調査する時代を鎌倉時代に設定しました。題材を軍記物語としたのは、武士になれない女性がどのように活躍しているかがわかりやすく描かれているのではないかと考えたからです。

調べてみると、**鎌倉時代の女性は影響力をもった存在として描かれていること、〈諫める存在〉として女性が描かれがちなこと**などがわかりました。また、題材となった事件が起こった時代と、作品が書かれた時代が離れていることから、文学をとおして正確に当時のジェンダーを検証することのむずかしさも今回の発表をとおして知りました。

宮島菜々美さん 工学部

受講を終えて 受講生のコメント

学生それぞれの作品、ジェンダー感覚にふれることができて、新しい学びと刺激を受けとりました。

小島さん（総人）

幼少期から慣れ親しんだディズニー作品や童話をジェンダー学の視点で見つめ直すと、受けとり方がまったく異なることに驚きました。

岡村さん（文）

これまでなにげなく楽しんでいたコンテンツに、新しい発見がたくさんありました。

河野さん（文）

日常のなかで、これまでなんとなく覚えていた違和感が、発表やディスカッションをとおして明確になりました。

日高さん（文）

とりあげる作品について、ジェンダー的な問題点をあげる人、作品をこまかに分析する人など、さまざまな視点が興味深かったです。

齋藤さん（文）

私たちのジェンダーに関する価値観の形成に、メディア作品がいかに影響を及ぼしているのかを知りました。

井田さん（教育）

ジェンダーの課題に対する意識が変わり、社会のあり方や自分自身の態度について考えるきっかけになりました。

高尾さん（法）

ふだんから関心のあったジェンダー学。深く考え、探究できる有意義な授業の時間でした。

谷口さん（法）

ジェンダー学の視点から、好きな文学作品を考えてみる経験は刺激的でした。

倉科さん（経済）

女性という性別による「役割分業」の話など、これまで思い至らなかった視点が身につきました。

砥石さん（医）

毎回、先生や受講生の考えを聞いて、自分のなかにある無意識のステレオタイプに気がつきました。

宮島さん（工）

interview 01

白浜の環境が育む豊かな海の生態系。解きあかす鍵は、生きものへの熱量と愛

山守瑠奈

フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所 助教

やまもり・るな
京都大学農学部卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程を修了。2021年から現職。近著に『たくましくて美しいウニと共生生物図鑑』(創元社、2021年)がある。

瀬戸臨海実験所の位置する白浜の地層は、砂岩と礫岩が混じった塔島礫岩層からなります。比較的柔らかで崩れやすく、穴やくぼみをつくりやすいので、白浜の海にはみずから地層に掘った穴で生きる生物や、その穴を巣穴に利用する生物が多く生息しています。

たとえば、ウニの一種であるタワシウニは、鋭い歯で岩盤を掘って巣穴をつくります。おもしろいのは、この巣穴内にゴカイなどの別の生物が共生していること。さらに、タワシウニの死後には、ムラサキウニやナガウニという別種のウニが巣穴を借用し、新たな共生系が築かれます。その代表例がハナザラという貝の仲間。二次利用するウニの巣穴にのみ生息する種で、扁平な貝殻の下から覗く、小さくつぶらな黒い目がなんともかわいくてたまりません。

海洋生物への人一倍の熱量

物心つくころから海洋生物が好きでした

ウニの巣穴にのみ生息する貝類の仲間のハナザラ

が、生物学的なおもしろさに目覚めたきっかけはクラゲです。「ウリクラゲは成長するとミズクラゲになる」と母親から教わり、信じつづけていたのですが、中学生になってクラゲ図鑑に目をとおすと、なんと、ウリクラゲとミズクラゲは動物門から違うと書いてある(笑)。その驚きもさることながら、図鑑に書かれたクラゲの生態に魅せられ、生きものの世界にハマってゆきました。

京都大学の受験を決めたのは、高3の夏。日本生物オリンピック二次選考に出場したことで、私と同じような熱量で生物を見つめ、深い知識をもつ人たちとはじめて出会ったのです。志望校を聞いてみると、京大志望者の多いこと。こんな熱い人たちと一緒に大学生活を送りたいと、一念発起して京大に照準を定めました。合格はしましたが、苦手だった数学の点数は散々でした(笑)。

1回生のころから自主的に白浜に通い、瀬戸臨海実験所を拠点にクラゲや貝を調査していました。転機は、2回生で受講した加藤真先生の講義。授業後にふと、白浜での調査のことを話すと、加藤先生の目の色が変わり、「来週、奄美大島で調査しない？」と声をかけていただいたのです。こんな機会はないと奄美大島に飛びました。調査をとおして学んだのが、現在の研究テーマである海洋生物の共生系。このときの好奇心にいまも背中を押されています。

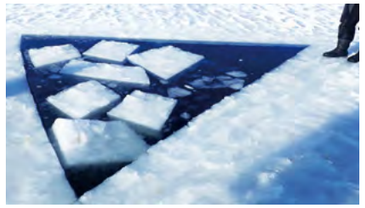
世界で唯一、磯の生態系を追う研究者として

大学院時代は、白浜で磯のウニを掘り出しては、巣穴に潜む生物を数えていました。磯の巣穴は海に入って岩を割らねば調査できません。たいへんさゆえに研究があまり進んでいないのが実情です。人間の生活空間から近い磯の生態系を知ることは、海洋開発の面からも重要です。環境保全活動にも力を入れたいと考えています。

とはいえ、やはり原点は「おもしろい！」という興奮。研究中は、研究対象の生きものに夢中になっています。2022年に、深海に生息し、陸上から流入した落ち葉を巣づくりや食料に利用するクシエライソメの生態を解明しました。口元のぷっくりした丸い器官を動かして落ち葉を運ぶのです。この姿を見て、「なんてかわいいんだ」と思ったのがこの研究をはじめる原動力でした。

自身でイラストを描き、日々の会話につかえる海洋生物のLINEスタンプを発売するなど、アウトリーチ活動にも積極的に取り組む

研究にかぎらず、迷ったときは「楽しい」と思える方向に舵をきってきました。選んださきになにが待っているのかはわかりませんが、そう思った方向に進めば、楽しい場所にきっとたどり着けるはず。そう信じて、邁進の真っ只中です。



趣味はダイビング。写真は−2°Cの北海道の知床の海に潜ったときのもの。右上は知床の海で出会ったキタユウレイクラゲ

海洋生物だけではなく、鳥類にも愛を注ぐ。写真は自宅で飼っているブンチョウ。赴任を機に白浜に引っ越し、消防団に入団するなど、地域との交流も積極的に重ねている

interview 02

演劇という装置が可能にするコミュニケーション。アートを介した対話の可能性を考える

末長英里子
経営管理大学院 特定助教

すえなが・えりこ
京都大学農学部卒業。京都大学大学院農学研究科修士課程を修了。立命館大学情報理工学部研究補助員などをへて、2021年から現職。

いまの研究テーマは、演劇やアートの手法をつかったワークショップや教育の実践と検証ですが、出身は農学部です。将来にこれといった目標のない、ごくふつうの京大生でした。学んでいたのは、森林や里山の生態系。この分野は地域住民の協力が不可欠なことから、当時は「市民参加」という言葉や「ワークショップ」という言葉を耳にする機会が多くありました。

価値観が180度変わったワークショップ体験

しかし、当時の私はひねくれていました(笑)。「市民参加のワークショップ」といっても、一方的な説明と、予定調和な質疑応答という「形だけのもの」も多いのではないかと疑いをもっていたのです。そこで、まずは自分の目で見て、体験して確かめてみたいと、3回生のころ、大阪大学で開かれていた「ワークショップデザイナー育成プログラム」に足を運びました。そこで講師をされていたのが、いまは同僚でもある蓮行先生(経営管理大学院特定准教授／劇団衛星)です。演劇の方法論をもちいて対話を生み出すというワークショップのあり方は、これまでワークショップに抱いていた印象とは違って、とても楽しいものでした。その魅力に引き込まれ、蓮行先生の劇団でアルバイトをはじめ、小学校や環境教育などのアウトリーチ活動に携わることになったのです。

上／蓮行先生による講義の風景
下／蓮行先生の担当する大学の授業では、「パフォーマンス創作」を中間課題にしています

正直なところ、それまで演劇はもちろん、文化や芸術にあまりふれてきませんでした。むしろ、「アート＝高尚なもの」と感じて距離を置いていたほど。それも、演劇の公演を実際に観て、アーティストと対話したことで印象が変わりました。私が関わる小劇場演劇は、300人以下、少ないときには100人以下の観客の前で公演するジャンルです。商業演劇とは違い、アーティストの問題意識がありありと現れます。演劇との出会いは、楽しさをもたらしてくれたいっぽうで、自分の想像力の狭さに直面し、傷つくことも多かった。私が歩んできた世界とはまったく違う世界が世の中にはあり、私はそれに無頓着だったのだと思い知ったのです。

演劇的手法で生まれる新たな対話

現在は、学校や企業、病院などさまざまな場所でワークショップを開催するほか、アウトリーチ活動をする演劇家の支援に力を入れています。

直近で開催したのは、糖尿病や認知症をテーマにした病院や薬局でのワークショップです。参加者は、医療従事者と、地域住民のみなさんです。たとえば「自分が糖尿病患者だと打ち明けるかどうか」など、日常生活でだれもが直面しうる健康にまつわる出来事をテーマに、参加者が協働して劇を創作して演じます。劇というフィルターを通すことで、ふだん感じている本音を口にしやすくなったり、セリフを考えるために異なる立場の人に思いを馳せてみたり、通常の議論では生まれない感覚に出会えるのがポイントです。

説得力が重視されるプレゼンや議論の場では、言語化の得意な人が強い立場になりがちです。でも、演劇には、感情表現や身体をつかう動きも重要ですから、通常のワークショップとは主導権を握る人が変わることが多いです。置かれた状況や立場上、自分の思いを話しづらい人や、言葉にすることが苦手な人が、思いを表現するきっかけになるワークショップづくりをめざし、改善と研究をつづけています。

偶然をだいじに、そのときどきにおもしろそうだと思うことを選んできました。いちど選択したからといって、その道を歩きつづける必要はありません。もし、選択に迷う瞬間が訪れたら、ときには、周りの信頼できるひとからの誘いや助言に乗っかって、挑戦してみてはどうでしょうか。

好きな気分転換の手段は山に登ることです。写真は大文字山の山頂の風景

interview 03

運に導かれてたどり着いた先は心と頭を揺さぶる国、インド

池亀 彩
アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

いけがめ・あや
早稲田大学理工学研究科修士課程を修了後、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学、京都大学大学院人間・環境学研究科、インド国立言語研究所などで学ぶ。イギリスのエディンバラ大学にて博士号(社会人類学)取得。東京大学東洋文化研究所准教授などをへて、2023年から現職。

インドとの出会いは、早稲田大学理工学部建築学科で建築史を学んでいた学部生時代。建築史の分野は、日本、または欧米の建物が研究対象になることが多かったのですが、私の所属していた研究室は当時、アジア建築の研究を展開しはじめていました。

アジアの国をいくつか訪ねるなかでしだいに惹かれていったのが、西洋とも東洋とも違う、独自の文明を築いてきたインド。さらに、研究領域も、建築物以上にその地で生きる人たちのことを知りたいと関心が移ってゆきました。ベルギーへの留学をへて、京都大学大学院人間・環境学研究科の人類学のゼミに入学し、本格的に人類学の道を歩みはじめました。

インドで問う、「権力とはなにか」

人類学の研究をはじめて、3年間をインド南部カルナータカ州のマイスール市で暮らしました。慣れないカンナダ語の習得、マラリアや感染症の危険など、一人での滞在に困難はありましたが、現地の方にも助けていただきながら、2年めには王族へのインタビュー調査までこぎつけました。

かつての不可触民であるダリトのグルM.C.ラージ氏とパートナーのジョーティさん。「ラージさんはすでに故人ですが、彼からは多くのことを学びました」

私の研究分野は、歴史史料とフィールドワークをとおして、対象地域の社会や文化に迫る歴史人類学です。なかでも、追究しているのが権力のあり方。権力をもつ人物には、一方から見ると抑圧者の側面がありますが、もう一方には民衆を惹きつける魅力的な側面があり、その両面によって権力はつくられます。近年はとくに、グルとよばれる宗教指導者のあり方に着目し、グルが必要とされる背景に迫るべく研究を重ねています。建築史学においても建築物と権力との関係は興味深いテーマ。研究分野は変われど、探究心の核は共通しています。

だいじなのは「なにを研究しないか」

1年のうちの3か月から半年をインドですごして、かれこれ20年以上。長年通ってもなお、インドにいると頭を揺さぶられるような驚きや衝撃の経験ばかりです。研究テーマになりうる、「なんでだろう？」という疑問が尽きることはありません。

しかし、こうした疑問はなにも、異文化だから浮かんでくるものではないのです。日本に暮らしていても、「なんで京都には都市銀行より信用金庫が多いんだろう」など、不思議に思うことばかり(笑)。興味をもちさえすれば、なんでも研究テーマになるというのが私の考えです。むしろだいじなのは、「なにを研究しないか」。はたしてそれは、私が取り組むべきテーマなのかと、自身に問うことも重要。

進む道が決まったあとは、前進あるのみ

これからも調査をつづけて論文を書き、成果を積み上げることは第一。一方で、情報が少ないゆえに誤解されやすいインドという国の姿を、どんな人でも手にとりやすい方法で伝えられないかを模索しています。2021年に出版した新書『インド残酷物語』(集英社新書)は、その第一歩。近年、日本で大ヒットしたインド映画がいくつかありますし、こうしたポピュラーカルチャーを通じて拙書を読んでくれる方も多く、ありがたいかぎりです。

私のこれまでの歩みは、運に恵まれた部分も大いにあります。自分で道を選んだというよりも、選んでもらっている感覚でした。でも、「あのときこっちを選んでいれば……」という後悔は私にはありません。合わなければやり直せばいいし、さっさと切りあげてもいい。選ぶことに重点を置くよりも、一歩ふみ出した方向にとにかく進んで、やってみる。これしかないというのが私の信条です。

マハトマ・ガーンディーについての文章を書く仕事をきっかけに、ガーンディーが実践した糸紡ぎを知るべく、手紡ぎの習いごとに通いはじめた。綿花を育てるところからはじめ、糸を紡いで、布を織っていく。「無になって、糸車のリズムに身を任せられる時間は格別ですね」。写真は初期に紡いだ糸

卒業生インタビュー
みちみちて一歩

interview 01

想定外への挑戦で見つける自分の道。総合大学だからこそ広がった価値観

堀井詩織さん
デロイト トーマツ コンサルティング合同会社
京都市 京都女子高等学校 出身
農学部 卒業、農学研究科修士課程 修了

高校生の私にとって、京都大学は手の届かない遠い存在でした。高校時代はコーラス部の活動に熱を入れていて、進学について考えはじめたのは高3の夏。京大を受験するとは決めましたが、焦りは強く、高校の門が開くと同時に登校し、閉門時間まで勉強に励む毎日でした。

価値観を変えたインターンシップでの経験

遠い存在であり、「変人」のイメージのある京大でしたが、入学してみるといい意味で「ふつう」の人が多い印象を受けました。学問への興味・関心はもちろんのこと、趣味も豊富で、なにごとにも好奇心旺盛。みずからの思いや考えを伝えるコミュニケーション力と行動力に長けた明るい人たちとたくさん出会いました。

価値観が変わったのは、修士1回生のときに参加した化粧品会社での2か月間のインターンシップ。大学時代の専攻は食品科学ですし、商品開発の仕事に興味があったのですが、配属されたのはマーケティングの部署でした。すでに形になっている商品を前に、いかにこれを消費者に届けるのかを考えなければいけない。これまで勉強には自信があって、試験の成績で評価される世界に身を置いてきましたが、ビジネスの世界はそれだけではやっていけないことを痛感しました。発想力やコミュニケーションの力など、これまでとは違う能力が求められる世界を目の当たりにして、視野が大きく広がったのです。

大学時代はダンスサークルに所属。京都大学の11月祭にむけて練習に励んだ。曲目選びや後輩へのダンスの指導、衣装制作など、できるかぎりを自分たちで運営した。アルバイトもカフェやレストランなど、多数経験。「印象的だったのは海外からの観光客むけのゲストハウス。英語で受付をしたり、京都のおすすめスポットを紹介するなど、京都ならではの経験が思い出深いです」

進学先も就職先も、飛び込んでみなければわからない

卒業後は、コンサルティング会社に就職。化粧品やアパレル、自動車などを扱うメーカーの新規事業のサポートや、ECサイトの改善提案など、マーケティングやコンサル業務を担当しています。

大学での学びとは、まったく異なる分野に足を踏み入れましたが、じつは就職活動の第一志望は大学での学びを活かせる食品業界や化粧品会社でした。でも、うまくいかなかった。そんなときに助言をくれたのが、学生時代にダンスサークルで熱い日々をともに過ごした法学部出身の友人でした。「コンサルはどう？ 向いていると思うよ」と、凝り固まった考えをほぐしてくれたのです。文系学部の学生とも一生ものの関係を築けるのは、京大が総合大学だからこそです。

将来は、メーカーに転職して、消費者に近い場所で力を発揮したいと考えています。コンサル会社での勤務をとおして、扱う商品や業種、規模も違う多様な会社を見てきました。これはきっとメーカー勤務では経験できなかったことです。大学も就職先も、外から見えている姿はごく一部。入ってみなければわからないことばかりです。自分の可能性を狭めず、たくさんの人と交流しながら、選択肢を広げてください。

column 休日のすごし方

入社前はコンサルティング会社には忙しいイメージがありましたが、フレックス制の勤務体系をいかして、柔軟に楽しんでいます。平日の仕事終わりはジムに通って身体を動かしています。美術館に行くことが好きで、休日は作品を見て英気を養います。

interview 02

レールの上を歩まない私を受け入れてくれた京大の懐。「私だけの経験」が未来を築く礎に

小林佳代さん
株式会社 日本ケアサプライ（三菱商事株式会社から出向）
京都市 京都教育大学附属高等学校 出身
京都大学医学部人間健康科学科 卒業

京都で生まれ育った私にとって、京都大学はずっと憧れの存在でした。保健師である母親に「資格を持っておくとよい」と勧められ、人と関わることが好きだったこともあり、京大医学部の先端看護科学コースを第一志望に据えました。

海外での暮らしに憧れて、高1の夏から10か月間アメリカへ留学。日本の勉強に遅れを取り、数学の試験で0点をとったこともありましたが、「受験勉強にはフライングもスピード違反もない」と帰国直後から受験勉強を開始。高1の範囲から復習しなおしました。

大多数とは異なる道を選ぶ決意

大学時代の思い出は、よさこいサークルの活動と看護実習です。1、2回生はサークル活動に熱中し、引退後は病院実習に励みました。実習を進めるなかで、「自分は看護師に向いていないかもしれない」と感じるようになりました。それは、実習が楽しかったからです。365日24時間安定した質の高いケアを提供することが求められる看護師にとって、えこ贔屓や自分の色を出しすぎることはあまり望ましくありません。一人の患者さんだけを毎日担当できる実習はやりがいを感じられましたが、毎日交代制で異なる患者さんを受け持つ仕組みのなかでは自分らしく働けない、と一般就職を決意しました。それでも国試までモチベーションが一度も落ちなかったのは、異なる道に進もうとする私を応援してくれた友人や先生の存在です。大学での経験やつながりは私の宝物です。

未来は変わりつづけるほうが楽しい

自己分析をくり返すなかで、「なにを」扱うかよりも「だれと」働くかが自分にとって大切だと気づき、海外でも広く事業を展開する総合商社への想いが強くなりました。しかし、看護学コースから一般就職をするのは少数派で、なかでも商社への就職例はほぼありませんでした。情報が少ないなかでの就職活動に戸惑いもありましたが、「自分にしか伝えられないこと」を心がけました。たとえ同じようにサークルの副代表や看護実習などを経験していたとしても、自分が感じたことや考えたことは私にしか話せません。ありのままの自分を自分の言葉で伝えられるよう面接に挑んだことが、いまにつながっているのかなと思います。

「京炎 そでふれ！彩京前線」というよさこいサークルに所属し、日本各地のお祭りでオリジナル演舞を披露。夜遅くまで会議や練習を行い、副代表としてチームづくりに励んだ。「ときにはぶつかり合いながら、チームとして1つのものをつくりあげるという経験から多くのことを学びました。喜怒哀楽を共有しながら駆け抜けた、充実した時間だったなと思います」

ヘルスケア部配属になり、現在は福祉用具レンタル卸事業に携わっています。入社当初は、この業界で「お金を稼ぐこと」に違和感がありましたが、営利企業の商社だからこそできる事業があり、それが社会の課題解決につながるのだと信じています。

現場から少し離れたビジネスサイドからヘルスケア業界を捉える立場になって意識するのは「病院」という非日常的空間で日常生活を送っている方の存在です。中にいると病院が非日常であるというのを、外にいると日常生活が営まれているというのを忘れがちです。実習という貴重な経験を通じて得た気づきは風化させず大切にしたいと感じています。

総合商社という職業柄、今後ヘルスケアとは無関係の部署への異動もあると思います。むしろいろんな業界やポジションで経験を積みたい。目の前のことに一所懸命取り組みながら、興味関心の赴くまま、ひたむきに挑戦したいです。

看護師国家試験後に学部の仲良いメンバーたちと。「テスト期間は図書館でいっしょに勉強したり、誕生日はみんなでお祝いしたりと思い出がたくさんあります。現場の第一線で活躍している友人がいることは、私にとって強みでもあり誇りです」

column 休日のすごし方

興味の赴くまま、まずはやってみる！

アンテナにひっかかったことはまず「やってみる！」が信条。社内プログラミング研修や美大の社会人向けプログラムなど興味の赴くままに参加。長期休暇にはフルマラソンに挑戦したりダイビングに行くことも。

interview 03

この目がとらえた社会の現状。だれも排除されない世界をめざして、世界を駆ける

藤本結月さん
独立行政法人 国際協力機構（JICA）
兵庫県 加古川東高等学校 出身
京都大学法学部 卒業

幼少期から、社会の〈当たり前〉から外れた方々の存在を強く意識していました。そうした人たちは、出自や国籍などを理由に公的なサービスを利用できなかったり、不平等な扱いを受けることがあります。私が法学部を選んだのは、こうした社会のルールはどのようにできているのかという前提を知りたかったからです。

モンゴルとフランスでのかけがえのない経験

大学時代は、一つの物事を追究するよりも、短期的な目標を立てて、あらゆることに挑戦するタイプでした。なかでも、大きな経験がモンゴルへの渡航。最初は、遊牧民への憧れという些細な理由からでしたが、数回訪ねるうちに、彼らの暮らしのなかに政治などに翻弄されてきた影響を感じとるようになりました。もっと深く知りたくて、2回生のころに渡航支援制度「おもろチャレンジ」に応募。モンゴル国と内モンゴル自治区で聞き取り調査をした約2か月は、自分自身がもつ認識や、調査相手と向き合う姿勢などにも深く向きあったかけがえのない時間でした。

「おもろチャレンジ」ではモンゴルの友人の協力で、友人の親戚の遊牧民宅に滞在した。捕まえたヤギを触る遊牧民宅の子どもたち。モンゴルで遊牧民とともにすごして感じたのは、その土地で暮らす人たちが感じる幸せや価値観を大切にしたいということ。これはいまの仕事をするうえでも指針になっています。思い悩んだときにふと思い浮かべる「ホーム」のような場所に、モンゴルで出会えたと思っています

もう一つの忘れられない経験は、フランスのパリ政治学院への交換留学です。講義も刺激的でしたが、私を変えたのは放課後の課外活動。支援物資を届けるために難民キャンプを訪ねました。衛生・治安面の荒れた環境への驚きとともに、テントで暮らす方からの言葉が忘れられません。「私たちの存在を伝えて。私たちは忘れられた存在だけど、あなたは力があるから」。自分の力を、現状を変えることにつかえないかと志しはじめた強烈な出来ごとでした。

挑戦してこそ見られる新たな景色

そうした経験をへて、就職活動では公益に資する仕事ができる公的な団体を志望しました。なかでも、理念や活動内容だけでなく、職員の方々の雰囲気に波長が合うと感じたのがJICAでした。

JICAの業務内容は、一つの地域に軸を置いて開発協力のあり方を考えたり、地球全体の経済や環境などの課題別に協力方針を考えたりと、多岐にわたります。私は今年度から平和構築部に所属し、「紛争を起こさない社会づくり」をめざす協力を、現地の方とともに考えています。まだまだ勉強中の身。さらに経験を積んで、自分なりの視点や経験が媒介となり、課題解決に資する仕組みづくりに貢献できるようになりたいです。

出張や研修でこれまでに、パキスタンや南スーダン、エチオピアなどに渡航しました。新しい場所に飛び込むことへの抵抗感はありません。思えば、幼少期の自分は、周囲の当たり前になじめず、浮いていると感じていました。だけど、高校、大学と世界が広がるにつれて、価値観が多様になってゆくことが嬉しかった。新しい世界で得られるものの大きさを知っているから、挑戦は苦でないのです。

モンゴル出張時にJICA業務の一環である「ビジネスアイデアサポート」のために遊牧民宅を訪ね、遊牧民が実際にどういった生活をしているかを調査

突拍子もない行動をおもしろがってくれる京大の雰囲気のおかげで、たくさんの得がたい経験ができました。「自分って変かな？なんか周りと違うかも」と感じている人こそ、輝ける場所が京都大学です。

左／研修で訪れたパキスタン南部の村。2022年の洪水被害による厳しい現実に衝撃を受けました。写真手前は客人用に敷かれた手工芸品。その奥からこちらを見つめる村の子どもたちが印象的でした
右／南スーダン出張時、安全管理上、出歩くことが困難でしたが、出発日に現地の方の協力で近くの山に行き、撮影した朝焼け

column 休日のすごし方

さまざまな人や情報にふれる仕事なので、休日は読書をしたり、意識的に自分の想いや軸を大切にする時間をつくっています。NPO団体の活動等の業務外の活動が仕事にも還元できることもあります。

密着！京大生の一日

授業はもちろんのこと、部活動や放課後、
はたまた通学時間も、学生生活を構成する大切な一部。
京大生のふだんの一日をのぞいてみました。

過ぎるのが速い大学生活。1日1日を大切に！

多様な人に出会えるのが京大のいいところ

case.1 実家暮らし

近藤里咲さん 教育学部 2 回生

兵庫県 雲雀丘学園高等学校 出身

臨床心理学の総本山で学びたい！

心身ともに疲れを感じていた高校生のころ、心理カウンセラーに助けていただいた経験があります。心理学の世界に興味をもち、実家から通える範囲という条件で大学を探しました。京都大学は心理療法のメッカとして知られています。「ここだ！」と受験を決めました。

工夫しだいで通学時間は有意義に！

自宅から大学まで2時間です。入学直後は定期券を買う前に、あらゆる通学ルートを試して、ベストなルートを見つけました(笑)。通勤ラッシュと重なるとたいへんですが、乗客が少ない時間にはノートPCを開いて予習や課題をすることも。実家暮らしを条件にしたいちばんの理由は、家族との時間。弟と妹と過ごすことが、私にとってのリラックス・タイムなんです。

高校生へのメッセージ

京都大学には「みんな違って、みんないい」という雰囲気があり、個性を認めてもらえる居心地のよさを感じています。とても充実した毎日。通学時間で悩む人がいるかもしれませんが、工夫しだいで有意義な時間がつくれます。大学選びは学びたいこと、挑戦したいことを第一に。あきらめずに挑戦してください。

通学の必需品はコレ！

リュックは機能性重視。両サイドのポケットは、通学中にモノを出し入れできるので重宝しています

ポイントはいかに荷物を減らすか(笑)。トートバックにも荷物を分けて、肩の負担を分散させます

かわいらしいものに惹かれます。中国語の資料を入れた中国風イラストのノートはお気に入り

授業でみっちりのスケジュールなので、小腹が空いたときのためのお菓子は必需品

1日のスケジュール

午前

- 1限のときは、朝6時ごろに家を出ます。

お昼

- 昼食は、吉田神社や学内のひっそりした場所で、おにぎりを食べながらゆっくりと過ごすのが好きです。
- 9月からスイスに留学します。留学前に単位をとっておきたくて、週5日間、2〜5限までみっちりとつまった時間割です(笑)。

午後

- 部活はフィギュアスケート部です。夏はオフシーズンなので自主練の期間。冬の朝練は、始発電車に乗って練習に向かいます。
- 授業後、京都の寺社仏閣や観光地などに寄り道することもあります。

夜

- 帰宅時間はだいたい夜8時ごろ。友人と夜ご飯に行くときは帰りがすこし遅くなることも。

case.2 一人暮らし

岩田美空さん 文学部 2 回生

愛知県 南山高等学校女子部 出身

目標は高く！ 言語学を学びに京大に

高校生のころに京大を訪ねたとき、キャンパスにいる先輩方がとてもかっこよく目に映りました。「どうせなら目標は高く！」と受験を決意。文学部を選んだのは、ソシュールの「私たちは言語で世の中を認識している」という考え方に出会い、感銘を受けて、言語学に興味をもったから。いまも言語への関心はつづいていて、世界各地の言語の違いに魅了されながら、専門を絞っている最中です。

大学近くの下宿だからこそのよさ

両親のアドバイスを参考に、下宿先を決めました。スーパーとバス停が近い便利な場所で、大通りに面しているので夜の帰宅が遅くなっても安心です。大学から近いのもポイント。空きコマに下宿に帰って休んだり、レポートを書いたり、過ごし方の選択肢が増えるのはなによりのメリットです。

高校生へのメッセージ

周りの成績やがんばる姿を見て、焦りを感じるかもしれません。でも、人は人、自分は自分。のびる速度や勉強の仕方は一人ひとり違います。自分にあった速度を意識して、落ち着いてコツコツと勉強に励んでください。

通学の必需品はコレ！

自転車に乗るので、手が塞がらないリュックを愛用

ゾウ柄のポーチは、友人のタイ旅行のお土産

無意識のうちに青色ばかりを選んでしまいます(笑)

授業のノートはiPadを使うか、レジュメのプリントに直接書き込みます

シャープペンシルは受験生時代からの愛用品

1日のスケジュール

午前

- 授業
  休日や放課後は部活のことが多いので、レポートや課題は空きコマに取り組みます。

お昼

- 昼食は、学食や大学近くのお店で食べます。下宿に帰ることも。

午後

- 夕方以降は部活に奮励
  アメリカンフットボール部でトレーニングスタッフを務めています。いまの担当は、選手たちの体重管理。選手の毎日の体重と食事内容をチェックして、適切な体づくりをサポートします。休日ももちろん部活。日本一めざして全力投球です。

夜

- 夕飯は自炊が多め。部活で疲れて帰宅することも多いので、時間のあるときに作り置きして冷凍しておきます。

部活が休みの休日は友人たちと京都の観光地を訪ねることも。祇園祭(上)と嵐山(下)での一枚。

Recommend

わたしの味方、わたしの見方

立ち止まったとき、
いつか読んだ・観た作品に
ふと背中を押されることがあります。
今号に登場いただいた方がたに、
高校生のみなさんに
手に取ってほしい作品を
うかがいました。

小林佳代さん

『ケアとアートの教室』
東京藝術大学Diversity on the Artsプロジェクト 編（左右社）

本屋で偶然見つけた「アート×福祉」というテーマがぶっ刺さり、私が受けないでどうする！ と受講を決意しました。「なにを」と同じくらい「だれと」学ぶかが大事だと感じていますが、意図的には選べません。与えられる縁だからこそ、思い立ったタイミングを大事にしています。

『ライオンのおやつ』小川 糸 著（ポプラ社）

生きているかぎりかならず死ぬ。寂しいような、でもじんわりとこころが温まるお話。ここ最近でイチオシの小説です。

『99%のためのフェミニズム宣言』
シンジア・アルッザ、ティティ・バタチャーリャ、ナンシー・フレイザー 著、**惠 愛由** 訳（人文書院）

日本社会では、ジェンダー平等の話題になると、女性管理職や女性の政治家などの比率が少ないことについて議論されることが多いです。これらの問題もとても重要ですが、競争が前提の資本主義社会のルール自体を変えないと、人びとの格差はなくなりません。また、日本社会は、世界と繋がっており、第三世界に生きる女性たちは、わたしたち先進国に住む人びとの暮らしのために、とくに抑圧されていることに気づくことができます。理想的な社会とはなにか、思考するヒントになる本です！

鈴木七海さん

末長英理子先生

Podcast 番組
『ジェーン・スーと堀井美香の「OVER THE SUN」』

「勝ちには行かないけど、負けへんで」、「罪悪感で人をコントロールするのはよくない」、「自堕落ではなく自然体」など、元気をくれる言葉、自分を省みる言葉の両方をくれるラジオ番組です。いろいろなおすすめの書籍が思い浮かびましたが、毎週、背中を押してくれるラジオとしてこちらを選びました。ぜひいちど、Podcastで聴いてみてください！

『プラダを着た悪魔』
デヴィッド・フランケル 監督

世界的ファッション誌の編集部で働くことになった主人公が、「プラダを着た悪魔」と呼ばれる編集長にふり回されながらも奮闘し、成長する姿を描く映画です。私も主人公と同様に勉強ばかりしてきましたが、社会に出たとき、自分の発言の受け取られ方を考える想像力やコミュニケーションの力の重要性を知りました。影響を受けた映画です。

堀井詩織さん

高島菜芭さん

『デートDV 予防学』
伊田広行 著（かもがわ出版）

デートDVとは、そして対等で健全な関係性とはなにかについて、わかりやすく説明されている本です。デートDVというとなかなか自分ごとに思えないかもしれませんが、一般的にイメージするような身体的な暴力だけでなく、たとえば（異性愛者の場合）、「ほかの異性と会ってはいけないのが当然だ」と言う、涙を見せて要求をとおす、デート代を払わせるなどもデートDVの一部です。パートナーとの関係にモヤモヤしたことがある人、おたがいを尊重した関係性を築きたい人はぜひ読んでみてください。

『ビジネス・ゲーム――誰も教えてくれなかった女性の働き方』
ベティ・L・ハラガン 著、**福沢恵子・水野谷悦子** 共訳（光文社）

とくに本誌を読む女性学生に一度触れてみていただきたいと思う一冊です。キャリア面でとくに女性が面しやすい課題を戦略的に分析する書きぶりが印象的で、「男性中心のビジネス社会で女性はルールを知らずに働いている」という表現が刺さります。現在の社会設計を新たな視点で客観的に捉えるための参考書的存在です。

『みえるとか みえないとか』
ヨシタケシンスケ 作　**伊藤亜紗** 相談（アリス館）

こども向け絵本ですが、「多様性」に迷ったときには毎度立ち返る一冊です。作者ヨシタケシンスケさんの作品は哲学的な問いを根源に感じるものが多く、その中でもとくに大切にしたい感覚を思い出させてくれます。

藤本結月さん

山守瑠奈先生

『クラゲのふしぎ』
jfish 著（技術評論社）

海洋生物に興味をもつきっかけの書籍です。中高生でも読める平易な文章で、クラゲという生物のおもしろさが綴られています。クラゲは95～98%が水でできている。いわゆる「クラゲ」は卵と精子で子孫を残す有性生殖世代であって、世代交代すると無性生殖をするポリプ世代になる。高校生の当時、この本に惹き込まれてミズクラゲの飼育に憧れ、母親に購入して貰ったポリプを6匹から2,000匹超に増やしました。無性生殖おそるべしです。

池亀 彩先生

『アフリカのシュバイツァー』
寺村輝夫 著（童心社）

1960年代にフランス領コンゴ（現ガボン共和国）で医療活動に取り組み、「原始林の聖者」と呼ばれるシュバイツァーは、現地では強く批判されている――。アフリカをなんども訪ねた著者が、現地の視点をおりまぜてシュバイツァーについて述べた児童書です。私たちの世界で「いいこと」とされていることは、相手にとってはそうではないかもしれない。植民地主義という視点や、「いいことは、ほんとうにいいことなのか」と問う姿勢は、もとを辿れば、小学生のころに読んだこの本が教えてくれました。